

石垣島の星見石について

横尾広光（杏林大学保健学部）

宮地竹史（国立天文台 水沢VERA観測所/石垣島天文台）

目次

1. 序論 … 文化財指定には
2. 5つの星見石
3. 方位石と高柱について
 - 3.1 方位石と航海
 - 3.2 高柱の風俗
 - 3.3 南方系海洋文化
4. 議論
5. 文献

石垣島天文マップ

星見石の所在位置



図一 1 石垣島と星見石の所在地

星見石、Ⅰ、Ⅲは、立石状で現存（場所は移動している）、星見石Ⅱは、方位石で、現在教育委員会で所蔵。野尻抱影の「日本星名辞典」では、川平地区の星見石が写真で紹介されているが、まだ確認できていない（P. 4参照）。

1. 序論

2007年7月7-9日に、沖縄県石垣島の「星見石」を宮地、横尾で探訪した。島の人々が昔から星を観測していたということで、既に「星見石」は有名で、八重山博物館やNPO八重山星の会などで調査されてきたが、星見石の原位置が、造成工事や農地改良事業などで移動したり、あいまいになってきたりしており、今の段階でそれらを記録しておく必要があると考えた。

星見石は天文と実生活（主に農業）が直接に結びついた民俗としても興味深く、天体観測の道具であったとすれば、原位置は特に重要である。また、文化財として登録し保存してゆこうとすると石の形状だけでなく、存在していた位置が問題となる。

八重山地方では、津波のために古い文書が失われているので、聞き込み調査が特に必要であると考えている。

石垣市立八重山博物館の黒島為一館長（前石垣市・市史編纂室長）が活字に起こされた「諸村農業之次第（仮題）」という資料がある。地元の研究者、喜舎場永珣が収集し、1960年のハワイ美術館館長の来島の時に、地元の写真館でフィルム化もされた文書である。表紙は欠損し、奥付がない。しかし、村名と新村分立の年度から判断して、1757年以後1765年以前のものであることが分かっている。

その文書には、稲作などについて諸村での「星見」の記載があり、粟の播種期についても「星見」があったとされる。岩崎卓爾一卷全集にも「星見」が記載され、岩崎卓爾が、明治30年代に平得集落で星見をしているようすを見たと記録している。

18世紀の各村でのこうした記録と、今いくつもの石が残っていることから、これらを「星見石」としてよいだろうと考え、調査を進めている。

ただ立石状の「星見石」は、宮古島では「人頭税石」と呼ばれている（ここは、八重山ではない）そうだが、その論拠はしらない。

2. 5個の星見石

八重山には、当時30村があり（上述文献）あと3村あった。首里の琉球王府から“代官”が来ていた。

各村で星見をするとして、その星見の内容は、①地平線の山に対して、その時刻に位置する星を指定する。②星見石を便利で精密な山の代用にする。③竹富島の星見石には、穴がついているので、そこからスバルを見たという説がある。④石によって長い棒を立てて、その棒の先で星を観測する。

以上、四つの方法が考えられる。

2-1. 川平の星見石

川平（かびら）湾地域は、神聖ゾーンである。ムリカブシウタギ（写真-1）がある。ムリカブシは六連星、つまりスバルのこと。ウタギは、御嶽。川平の星見石の写真が野尻抱影の「日本星名辞典」（P.176）で紹介されている（写真-2）が、これまでの調査では、探し出すことができていない。八重山博物館の黒島館長もこの話を知らず、地元の方も存在を知らないという。引き続き調査中である。



写真－１：群星御嶽（川平地区）

上：御嶽内のイビ(拝所)の入口。

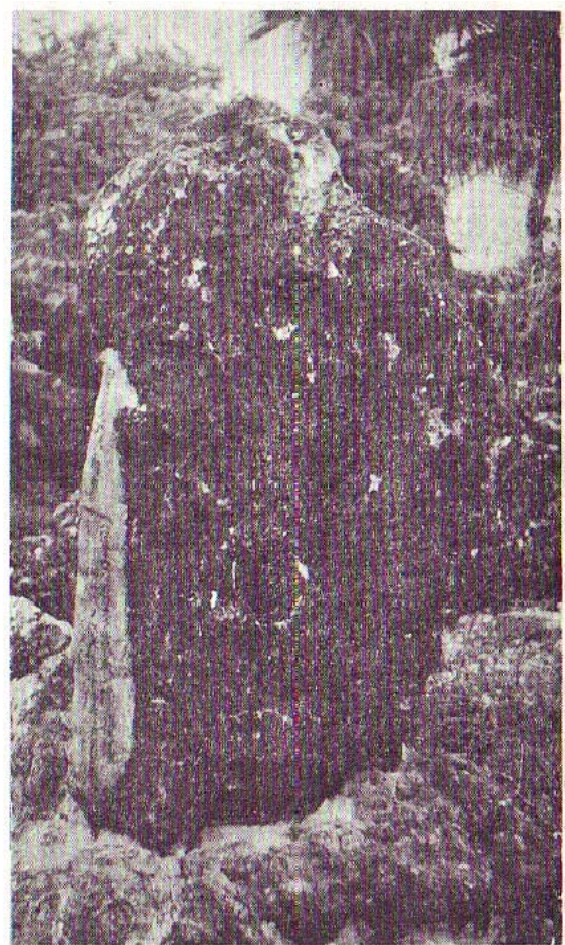
中：イビは、神聖な場所とされ、一般の者の立入は厳しく禁じられている。

下：御嶽のある敷地から、北東に海が遠望できる。

（写真撮影：横尾、2007.9）

写真－２：野尻抱影著の「日本星名辞典」（P.176）で、紹介されている星見石。まだ、現存を確認できていない。

「それで、六四年に石垣島へ渡航した人に頼んで星見石を探させた。なかなか発見できなかったが、漸く川平湾の海岸の藪林の奥で。苔蒸したその石を見つけ撮影してきた」（「日本星名辞典」）とある。



石垣島・川平湾の星見石（左側の白い部分に文字が記してある）

写真－３

立石状の星見石（Ⅰ）。

現在は道路わきに立っている。珊瑚でできた石灰岩。

これまで、道路工事で道路わきに寄せられたといわれてきたが、宮地の調査で、現在この自動車販売所の敷地になっている元畑だった場所にあったことが分かった（下の写真が原位置：ダイハツの看板の下の道路わきに移設された）。

（写真撮影：宮地、横尾、2007.9）



図－２ 星見石（Ⅰ）の所在地
（地図は、Google マップより）



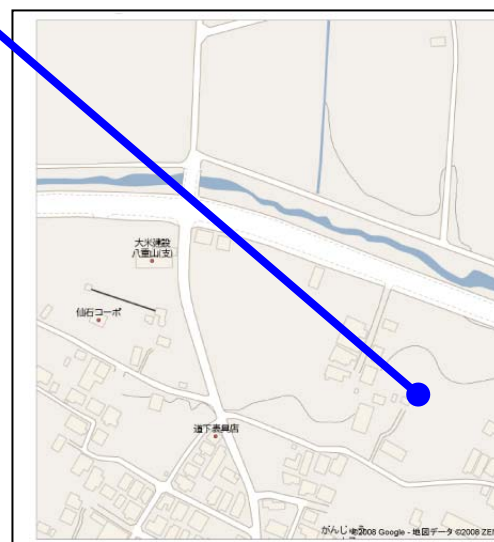


写真－４
立石状の星見石（Ⅲ）。

住宅地の傍の墓地の脇に残っている。珊瑚でできた石灰岩。

案内をしてくれた八重山博物館の黒島館長（写真下奥）によると、「これも少し動かされて、コンクリートで固められた」そうだ。

（写真撮影：横尾、2007.9）



図－３ 星見石（Ⅲ）の所在地
（地図は、Google マップより）

写真－５
方位状の星見石（Ⅱ）。

石垣市教育委員会収蔵。琉球石灰岩。

中心の穴から、八方に筋状の溝が彫られている。原位置は、津波で琉球王朝の役所が避難した地域に近く、ほぼ特定できたが、石がどういう向きで置かれていたかは不明。

（写真撮影：宮地、2007.8）



3-1. 日和山方位石との類似

石垣市教育委員会収蔵の「星見石」には、方位の刻みがあり、それは港町の日和山にある方位石とよく似ている。日和山の全国調査は行われていて出版もされているが、沖縄は含まれていない。この「星見石」のあった場所は、旧政庁の疎開地付近であった。

著者の一人の横尾は、三重県鳥羽港の日和山で方角石を見ているので類似に気づいた。この考えを発展させると、星見石と航海の結びつきも想定される。両者とも星と縁が深い。

傍証として、石垣市立八重山博物館に「星図（ほしず）」があり、同志社大学の宮嶋教授、国立天文台の伊藤節子研究技師たちも、来島してその存在を確認している。

黒島館長の推論の一つに、薩摩の船頭でものではないかという考えもある。また、大陸での明-清の交代期の動乱の時、薩摩が大軍を八重山付近に張り付けて様子をうかがっていた事情もあって、地方の民俗学だけでない、島外との薩摩-八重山航路によるつながりも入れて考える必要がある。



写真-6 日和山の方角石の写真
(撮影：横尾。三重県鳥羽港 日和山にて)

3-2. 高柱を立てたか

星見石による観測方法は、昭和3年喜舎場の書くところでは、「昔はこの星座（スバル）を見る場所が各村にあって、日没後老農達が集まり、三尋竿（一尋（ひろ）は、六尺、一尺は、30.3cm）を立て、三尋後から保しろ竿が一直線になったら、稲を蒔く時期、俗に種子取（タニドウリ）をきめた相です。云々」（野尻本より孫引き）とあり、宮良当壮「八重山古謡」でのスバル謡の註に「各間切（後の村）に一定の高き場所があって、石又は竿を樹てておき、晩は辰巳の刻に、暁は申酉の刻に観測することを怠らなかったのである。そして旧暦10月頃にスバルが竿の高さ凡そ一丈ほど昇った時に、稲の種子を苗代に播き、それから種子取祝（タニドルヨイ）をしたのである。云々」と書かれている。

3-3. 南からの海洋文化

高さ3m以上の柱を使う行事として、三重県志摩郡伊雑宮の夏至行事が思い出される。「新暦6月の田植えでは、神田の両端のあぜの中央正面に二本の丸柱が立てられる。そこに長さ3丈ほどの一本の太い青竹が縛りつけられている」。

なお方位石的星見石の中心穴が思い浮かぶ。①この高い柱の習俗は、東南アジアの海岸ぞいに分布しているとも聞いたが②ボルネオ原住民がノーモンを建てて季節を測っている。写真がニーダムの大著に掲載されているし、③ひょうたん、竹筒に入れた水が星に向けたとき、こぼれる量で季節を測る話を野尻が紹介しているし、④夏至とからんでいる。

ともかく、八重山ー沖縄ー薩摩ー高知ー志摩の流れで、星の観測について調べる必要がある。余談であるが、蜘蛛合戦の習俗は、同じ流れで分布しているという岩崎卓爾の調査がある。

4. 議論

星見、それをあらわす星見石は星の観測と農耕という実生活を直接につなぐ古くからの習俗で、それが岩崎の記述にあるように最近まで続いていた。しかし、琉球王府からやってきた“代官”は、暦を持参していたはずである。その暦は両属なので、中国暦と日本暦（薩摩暦）の両方があったはず。太陰太陽とは、月の満ち欠けから太陽の動きを指定する道具である。一方、村人は各村で独立に、星に対する太陽の動きを観測して播種などに役立たせていた。稲作は、非常に微妙なもので、暦できちんと日付が決まれば収量は非常に大きくなる。

その時代にどうして古来からの星見が残って、続けられていたのか。①王府は中国と薩摩の両属なので、どちらの暦を採用すると明言、普及できなかった。つまり、内々では助言しても（両暦は同じ結果あたえる）、それと独立に星見で暦にたよらず農業しているという体裁が必要だった。結果として、古い習俗が残った。②星見以前の低収量の米生産に基づいて税率が決まっていたが、星見、暦の導入で高収量になると、技術革新があったので税率を変更すると言わなければならない。それで、わざわざ星見を残して、税率を変更せず収量上昇分だけ同一定率で人々をうるおした。

そんな良心的な代官はいないと反論する人がいるが、そうとも断言できない。良心的官僚たらんとして官界に入る人間は今でもいる。うがち過ぎのデスクワークで考えたが、八重山星の会のワーキンググループの調査（続行中）でも、同じような解析がでているらしいのであえて書いておく。

5. 参考文献

- 5-1. 野尻抱影：「日本星名辞典」、東京堂出版
- 5-2. 岩崎卓爾：「岩崎卓爾一卷全集」、伝統と現代社
- 5-3. 黒島為一：資料紹介『諸村農業之次第（仮題）』石垣市立八重山博物館紀要、第13号、69-110、平成7年3月号
- 5-4. 南波松太郎：日和山、法政大学出版局
- 5-5. 筑紫申真：アマテラスの誕生、講談社学術文庫
- 5-6. 北尾浩一：天文民俗学序説、学術出版会
- 5-7. 喜舎場永珣：『八重山の音謡と舞踊』、雑誌『民俗芸術』昭和3年3月号
- 5-8. ニーダム：「中国の科学と技術：天の巻」
- 5-9. 岡田政吉；岡田政吉写真集一よみがえる昭和初期、鳥羽志摩の風景、発行人、山川勲、1996.
- 5-10. 斉藤慎一郎；蜘蛛合戦の文化論、大日本図書、1984